

3 新薬開発に向けたわが国での産官学連携のあり方 -2 企業の立場から

大友 俊彦

中外製薬株式会社
プロジェクト・ライフサイクルマネジメントユニット プロジェクト推進部

多くのパラダイムシフトを起こした医薬品の登場は、小規模な、かつ個性豊かな研究者集団の創意工夫と粘り強い研究の成果として成し遂げられてきた。イノベーションの初期では規模の大小はそれほど影響せず、病態とリンクしたターゲットを見つけ出し、そのコンセプトに合った化合物を創出するかにかかっている。しかし、ターゲット見極めにおける創造性は長年の研究歴史や、常に先端科学に身をおいている研究者のなかから生まれてくるものであり、企業研究よりはアカデミアの知識、経験、洞察と密接に関係すると考えられる。先端技術や最新科学のなかで、ひとつの発見や技術基盤をもとに、イノベーションを起こすためには、アカデミアとの連携により、ベンチャー的な手法を取り入れ、環境変化に対応する研究開発マネジメントが重要となる。

一方で、網羅的なゲノム解析の結果、近年多数の分子標的医薬品の開発が進められている。加えて、新たな薬剤開発手法や診断技術手法は確実に進歩と変革を遂げ、適切な患者へ適切な医薬品を提供できる個別化医療が今後の抗がん剤の主流となると考えられている。個別化医療に向け、コンパニオン診断薬との同時開発を実

現していくには、非臨床段階あるいは早期開発段階より、企業とアカデミアとの連携による、有効性、安全性に関連するバイオマーカー探索を含めたトランスレーショナルリサーチが重要な役割を担うようになってきている。

産官学連携の一例として、肝細胞がんを高発現する Glypican-3 の同定、アカデミアとの協同での病態との関係解明、ならびに企業の技術を用いた抗体医薬の創出により開発に至っている。産官学連携の成功には、「価値観の理解・尊重」、「目的へ向けたベクトル・利害の一致」、「技術、ノウハウの補完（役割分担）」が重要であり、「貢献の評価の透明性」をいかに確保するかが課題である。本シンポジウムでは、これらの経験をもとに、産官学連携におけるパートナーシップについて述べたい。